

## 円爾禪の特質——円爾と蘭溪の比較からみて——

円爾は、多様な教や行について広く研究講義し、密教修法を實踐していた。禪とそれらの〈兼修〉は、〈教禪一致〉〈禪密一致〉であると研究史上説明されている。しかし、円爾は著作において、「禪は、唯だ之と異なるのみに非ず、遙かに物外に超ゆ」「心、等・妙の深域を越ゆ」（『十宗要道記』）とし、禪の修行と境地を独自のものと位置づけ、その他の教や行と峻別している。いわば、〈教禪非一致〉説をたてているのだ。そこで本発表では、円爾における〈教禪非一致〉説を前提に、禪の独自性と〈兼修〉の実践を、全体としていかに理解すべきかについて検討する。

まず、円爾の禪の特質について、蘭溪道隆と比較しながら考察する。円爾と蘭溪は『坐禪論』という同じ名称の著

作を残している。二人の『坐禪論』は、構成も字句もよく似ているが、両者の見解には大きな差異がある。蘭溪の『坐禪論』は、坐禅すなわち「結跏趺坐」の身体性を「一念不生」という精神性と関連づけながら、綿密な「工夫」の方法を述べる。実践的な坐禅論を展開しているのである。一方の円爾『坐禅論』は、「行住坐臥」の日常行動における「無心無念」の精神性を重視しており、坐禅の実践や工夫を論じない。円爾の『坐禅論』は、「坐禅」の名を冠していないながら、坐禅を重視していないのだ。

次に、『十宗要道記』から、円爾が坐禅の実践を重視しない理由を指摘する。円爾は、十宗の最上に位置づけた「仏心宗」において、禅では修行が不要であり、悟りは短

吉原 健雄

時間で獲得できるとしている。円爾が坐禅の身体性を重視しないのは、時間をかけ坐禅修行をして向上するまでもなく、禅者は自己の心の根底にある悟りに到達できるとしたからである。

坐禅修行を介することなく悟りに到達した後、禅者は、教学研究や密教修法を利他の活動として実践していく。これが、禅とそれ以外の教・行の〈兼修〉をおこなった実践の構造であった。円爾の実践は、類似が指摘されてきた蘭溪とは異なる。また、〈栄西―栄朝―円爾―無住〉という臨済禅僧の系譜のなかでも特異な立場と考えられる。

（東北工業大学非常勤講師）